
箱の中

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱の中

【Nコード】

N4141P

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

補陀落渡海船に一人の僧が乗りこんだ。

「万蓮様ー」

あなたは聞こえているでしょうか。

あなたを慕っている村人の声が。

「万蓮様、今生のお別れです」

あなたの乗っている渡海船とをつなぐ綱がザクツと切られました。

静寂の中にあなたの読経が低く流れていきます。

「万蓮様」

そう呼ばれて振り返るあなたは、この小さな寺の僧でした。

優しいそのまなざしは、いつも民のことを考え、作物ができぬことを憂い、毎日昼夜を問わず読経をしておりました。

廃寺となっていた蓮法寺を復興させたあなたはまだ四十前の僧侶。元は武家の生まれのようですが、誰も詳しくは知りません。ただ、奥方と子どもを流行病で失くしたらしいということは、戒名を刻んだ小さな墓標の前で佇む姿を時々みかけることで気付いてはいました。

あなたは自ら鋤を持ち、できた野菜を貧しき者にお与えになり、

法衣もひどく薄く破れてもそれを繕って着ておられました。

冬の寒い日もあなたが静かに経を唱えると、いつの間にか村人の心も温まるようでした。

藩の財政は逼迫し年貢の取り立てが厳しくなっていましたから、実りのない田畑を耕したところで、百姓が潤うはずもなくあちらこちらで飢餓に苦しみ、死んでいく姿をあなたは見ることになりました。

どのようにあなたが一心に経を上げたところで、百姓を救うことができぬと知ると、そのことが僧であるあなたを余計に苦しめました。

ある日のこと、あなたは村人の平次を呼び、

「天竺の南にあるという補陀落^{ふだらく}へ行こうと思う」

「それは随分と遠いところへ。どなたと行くのですか」

「一人だよ」

「そ、そんな」

「いや、仏典に書いてあるのだ。補陀落へ行けば人々が安穩に暮らすことができる浄土への道を教えてくれるとな」

「でも、そのような遠いところへ行くには、大きな船がいるでしょう」

「いや、船は小舟でいいのだよ」

「では櫂や櫓、帆などが載るでしょうか」

「そんなものはいらぬ」

「万蓮様、それは無茶と言つもの」

平次はあまりに無鉄砲なあなたの言葉に我を忘れて大声をあげました。

「いいのだよ。その代わり伴走船を平次にしてもらいたいのだ」

「伴走船って、何ですか」

あなたは落ち着いて語りだしました。補陀落へ行く渡海船を、海流の流れに乗せるために引つ張って行く船だということ。

聞いていた平次は泣きながら首を振りました。

「後生です。万蓮様。そのような辛い仕事を私にやらせるのですか」
「仕方がないのだよ。誰かに頼まないと、渡海船には動かせるものは何もないのだから」

「そ、そんなことできるわけがありません」

必死に頭を下げる平次に、あなたは笑って言いました。

「私は浄土へ行くのだよ」

「そこへ着くまでに、どんなに苦しむか……」

「苦行の先に極楽が待っているのだ。成し遂げれば、ここの村人たちも浄土への道が見えるというものだ」

「そんな」

「平次、お前しか頼む者がいないのだ。昔、船に乗っていたという話をしていただろう」

あなたの目の奥に光る決意の固さを知って、平次も決心しました。

「分かりました。渡海船をみんなで造ります」

「ありがとうございます」

あなたが差し出した渡海船の図面には、四方に発心門、修行門、菩薩門、涅槃門がありました。真ん中にあなたが入る箱を造るというのです。即身仏になると決めているあなたの恐ろしい決意に、今更ながら平次の心は揺らぎました。

「万蓮様。人がどう言おうと、辛くなったら帰ってきてください」

「ああ、わかっておる」

あなたは優しく微笑みました。

その日から、村人が集まり渡海船の建造に取りかかりました。藩も財政が逼迫してるとはいえ、あなたがこの民のことを憂い、そのために補陀落渡海をするというのを聞き腕のいい船大工を寄こしました。万葉の時代から数百年、補陀落渡海を成し遂げた者は二十人に足りないのですから、いかに大苦行かがわかるというものです。

船は八カ月かかって完成しました。

立派とは言えない小さな渡海船。あなたは渡海船の舳先に伴走船とつないだ綱をしっかりとくくりつけました。

「いいかい、平次。この箱の蓋をしつかりと閉めてくれよ」
あなたが平次に向かって礼をすると、泣きながら平次たちは蓋を
しました。二度と出ることはない小さな空気口しか開いていない蓋
を。

あなたは村人が読経する中、伴走船に曳かれて行きました。

静かな海に流れるあなたの読経。

「万蓮様、今生のお別れです」

平次の涙の叫び声が聞こえました。一瞬、綱が外れて箱ががたんと揺れました。

もう、誰の声も聞こえません。

あなたは箱が壊れない限りもう箱から出ることはないのです。

二十年後、浜に木箱が流れ着きました。

漁師たちが恐る恐る開けてみると、袈裟を着た白骨が数珠を啜えております。箱の内側には血で書いた文字。

「涅槃は何処」

苦しきの余り書いたのでしょうか。

哀れに思った村人が僧を呼んで参りました。

足元がよろめきながら走り寄った僧は箱に縋りつきました。

「万蓮様。あれから民は飢えることなく暮らせております」

その僧はあなたと苦しき別れをした平次でございました。

静かな夜の海辺には、どこからともなく読経の音が聞こえます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4141p/>

箱の中

2010年12月31日06時55分発行